

韓国の体質理論：四象医学

広田 曄子
曄小児科内科

韓国の四象医学は李朝末期に李濟馬（1837～1900）が「東医寿世保元」（1894）を発表して提唱した学問である。彼は地方長官で元気だったが中年に至って難治性の幽門狭窄と多発性神経炎を患った。名医をたずね、自らも医学を勉強して治療してみたが無効であった。そこで彼は東洋哲学の源流といふべき「周易」と「内経」を深く検討し生命現象を探求して四象医学をうち立てた。

四象とは万物始生において最小實在単位ともいふべき太極が陽極と陰極の二つの形象に分かれ、更に陰中陽（少陰）、陰中陰（太陰）、陽中陽（太陽）、陽中陰（少陽）の四象になることを意味するものである。

大自然と同様に人体もその始生から既に陰陽調和の具合によって生まれつきこれら四つの体質に区分されるというのが、四象医学発想の原点である。

人類で最も多い体質は太陰（陰中陰）の人である。このタイプは肝大肺小であり、肺が弱いので、喘息になったり、かぜをひいたりしやすい。少陰（陰中陽）の人は腎大脾小なので胃腸が弱い。少陽（陽中陰）の人は脾大腎小なので腰痛をおこしやすく、腎虚になりやすい。太陽人は陽中陽の人で肺大肝小であるが、このタイプはごく少ない。

このように四つの体質には臓腑の機能上の強弱があり、それぞれにかかりやすい疾病が異なり、体質に合う食物、薬物が決まっている。したがって食事はもちろんのこと、薬物も各々の体質に合った生薬で処方し組み立てられているので、一般の漢方処方薬とは趣を異にする。真に体質改善を行おうとするならば四象医学は秀れている。

また、四象医学は中国の古い哲学を研究して出来た学問なので、医学にとどまらず、職業も体質によってふさわしいものが決まり、人間の生き方も体質をわきまえば幸せな生き方が出来ると説くものである。